GEKKAN-WIEN Mai 2023 令和５年５月号 Nr. 400　平成元年創刊 gegründet 1989

月刊 ウィーン
GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年　創刊 34 年目　Nr. 400
2023年5月号

Gustav Klimt, Wasserschlangen II, 1904/1906–07　Privatsammlung, courtesy of HomeArt　部分

杉本純の 原子力の話 II ウィーンと京都 133

政府の統合イノベーション戦略推進会議は四月一四日、核融合エネルギーを新たな産業と捉え、実用化に向け加速化を図る「フュージョン・イノベーション戦略」を決定した。

同戦略では、核融合エネルギーについて、カーボンニュートラル、豊富な燃料、固有の安全性、環境保全性の特長をあげ、「エネルギー問題と地球環境問題を同時に解決する」と強調。欧米エネルギー分野での一般的呼称を踏まえ、「フュージョンエネルギー」と表現。今後十年を見据え、「技術的優位性を活かして市場の勝ち筋をつかむ“フュージョンエネルギーの産業化”をビジョンに掲げる」としている。

核融合エネルギーの実現に向けては現在、国際プロジェクト「ITER（イーター）計画」が進められており、日本も超伝導トロイダル磁場コイルの物納などを通じ同プロジェクトに貢献しているが、今回の「フュージョン・イノベーション戦略」では、今後の建設進展に伴う調達減少で需給縮小・空白期間が生じることを懸念。その上で、発電実証を行う原型炉開発への民間企業参画を見据え「フュージョンインダストリーの育成戦略」を提唱した。そこでは、「見える」、「繋がる」、「育てる」を三本柱に、現在、文部科学省の作業部会・ワーキンググループが二〇五〇年頃としている発電実証時期を「できるだけ早く明確化する」ことや、他分野技術とのマッチングの場となる「一般社団法人核融合産業協議会」（仮称、既存の核融合エネルギーフォーラムを発展的に改組）の年度内設立、安全規制に関する議論、イノベーションを創出する振興技術の支援強化、教育プログラムの展開などを盛り込んでいる。

統合イノベーション戦略推進会議を所管する高市早苗・内閣府科学技術政策担当相は、同日の閣議後記者会見で、「政府における司令塔を担う立場から、関係省庁と一丸となって様々な政策手段を総動員し、産学官が連携することによって着実に戦略を実行できるよう取り組んでいく」と、強い意欲を示した。

会見を行う高市大臣
（内閣府ホームページより引用）
https://www.jaif.or.jp/journal/japan/17330.html

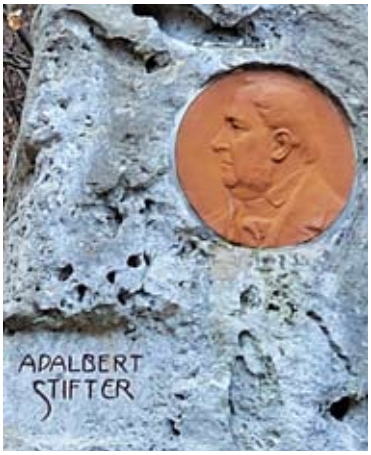
さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市に関係する偉大な作家（その一）を紹介したい。一八〇五年に当時オーストリア領、南ボヘミアのオーバープラーンに生まれたアーダルベルト・シュティフターは、十二歳の時に父が車の事故で死去。以後祖父の仕事の手伝いに励むが、一九年にクレームミュンスターにあるベネディクト派修道院学校に入り七年間学ぶ。二六年、ウィーン大学に入り法学を専攻するが、自然科学の講義も取りつつ、ウィーンの音楽、演劇、美術などに触れ、自分は画家になるべき人間だと考えていた。生計のため家庭教師として上流階級の家にも出入りし、優れた教師として評判をとった。のちに宰相メッテルニヒの子息の教師も務めた。絵画制作に熱心に励み、しだいに絵の買い手もつくようになり展覧会にも出品。四〇年にある男爵夫人を訪れていたシュティフターは、その家の娘によって、ポケットに丸めて突っ込んであった書きかけの短編の原稿を発見され、この作品「コンドル」が男爵夫人によって『ウィーン芸苑雑誌』に掲載されて好評を得、文学作品の継続的な執筆を始めた。ウィーン時代に『習作集』、リンツ移住後は小学校視学官に従事しつつ、余暇に執筆活動を続け、『石さまざま』、『晩夏』、『ヴィティコー』などを出版。ありふれた人々の日常的な行為にあらわれた、質素・節度・克己を小説の題材として選んだ。ニーチェは、『晩夏』を「繰り返し読まれるに値するドイツ一九世紀後半の優れた散文である」と絶賛。トーマス・マンは、「シュティフターは世界文学の最も注目すべき、最も奥深い、最も内密な大胆さを持つ、最も不思議な感動を与える小説家の一人」と賞賛している。

一方、一八八八年に香川県高松に生まれた菊池寛は、幼少期より旺盛な読書家であった。家が貧しかったため、高等小学三年生の時は教科書を買ってもらえず、友人から教科書を借りて書き写した。高松中学校では記憶力が良く、特に英語が得意で外国人教師と対等に英会話ができた。中学卒業後、成績優秀により学費免除で東京高等師範学校へ進むも、本人は教師になる気がなく、テニスや芝居見物ばかりしていたため除籍処分。地元の素封家に見込まれて養子縁組により明治大学法科に入学するも三ヶ月で退学。父親の借金により一九一〇年、第一高等学校に入学。同期には後に親友となる芥川龍之介がいた。卒業直前に盗品と知らずマントを質入れしたのが原因で退学。その後、友人の実家から援助を受けて京都帝国大学文学部英文学科に入学。萬朝報の懸賞に応募した短編小説『禁断の木の実』が当選。芥川、久米らの好意により第三次新思潮創刊同人となり、戯曲を発表。京大卒業後は、上京して芥川らと夏目漱石の木曜会に出席。時事新報社会部記者となり、第四次新思潮に『父帰る』を発表。一八年、中央公論に発表した『無名作家の日記』などが高く評価され文壇での地歩を築く。時事新報を退社し執筆活動に専念。人生観や思想を基盤とした明快な主題を打ち出したテーマ小説が特徴。大阪毎日新聞・東京毎日新聞に連載した大衆小説『真珠夫人』が大評判となり、これ以降は通俗小説で健筆をふるった。二三年、若手作家のために雑誌、文藝春秋を創刊。三五年には芥川賞と直木賞を創設。文藝春秋が戦争に協力したとして、戦後GHQから公職追放されるも「戦争になれば国のために全力を尽くすのが国民の務めだ」といきどおった。

余談であるが、シュティフターの小説は読む機会がなかったが、菊池寛はいくつか読んだ。学生時代のデート時に、戯曲『父帰る』の台詞「親はなくても子は育つ」と言ったら「そのような話なの？」とあきられたのを今でも覚えている。今月も両市に関連する偉大な作家を紹介することができた幸運に感謝しつつ、シュティフターの写真を掲載させていただく。

■杉本純　元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長■

ウィーン 18 区にある記念像



ウィーン14区にある記念碑

オーストリア郵便の生誕二百年記念切手

没後八〇年記念切手